

立命電友会

『立命電友会 設立一周年において』

副会長 中島 一郎 (昭三十二年卒)

双和電機(株)専務取締役



昨年十一月一日に電気電子工学教室の先生方や役員各位の献心的なご努力と同窓生各位のご理解とご協力の末、念願の立命電友会が発足して早くも一年が過ぎました。いよいよ、平成六年四月には立命館大学理工学部びわこ・くさつキャンパス移転という全学始まっ

て以来の大きな事業の年を迎えようとしています。

改めて立命電友会が理工学部の衣笠キャンパス時代に発足できたことはご同慶にたえません。

また、この時期に微力な私が副会長の大役をお受けすることになり大きな責任を感じると共に感無量の思いで一杯です。

入学以来四十年余、その頃を振り返って見て、私の通学していた昭和二十年末頃の衣笠は、わら天神から学舎まで非舗装の細い砂利道で、その両側は畑しかなく、いつも凄い臭いの中をほとんどの学生は、黒い学生服に角帽姿で徒歩で通ったものでした。

学舎も今のように立派な建築物

でなく、殆どすべて木造の講義室や実験室で、それも相当老朽化したものでした。

その頃の衣笠山の麓には衣笠球場があり、プロ野球や大学対抗野球などが行われ、その横にはラジョ京都(現 近畿放送)の送信所もあり緑あふれる風光明媚な所でした。

なにしろ、周囲一円には娯楽施設どころか喫茶店の一つもなく、ただ畑や山に囲まれたのどかな雰囲気では真面目にならざるを得なかったことも事実です。

ただ、今とちがって学舎の数も少なく、校内のあちこちに池やクローバーの密生した広いスペースに恵まれ、誰もが自由にのびのびと過ごすことができました。

昼のひととき、そのような場所です釣りに興じたり、まだその頃には珍しかったドーナツ盤のポータブル型レコードプレイヤーを友人が持つて来て、それから流れる今までの感覚とちがった耳新しいアメリカンジャズやポピュラーのリズムとメロディ(今でもリバイバルで根強く支持されている一九五〇年代の曲)に仲間達と胸を躍らせ時の経つのも忘れて聴き込んでいたのです。

また、衣笠山も道をへだてず登ることが出来、授業の合間を縫つて仲間と共によく登ぼり、暗くなるまで山頂で本を読んだり議論をしたりしました。

丁度トランジスターが世界的に紹介された時期で、外書購読の講義に点接触型トランジスターの説明があり、我々真空管時代に育った者にとっては余りにもかけ離れた新しい技術に大きな不安と期待を持ったものでした。我々がトランジスターの現物を使う事が出来たのは卒業後三年以上も後でした。

今から考えると現在につながる偉大な技術転換期に遭遇した貴重な時期だったのです。

年月の経つのは早いもので、気がつくとも馬齢をかさね紅顔黒髪だった私も今や還暦！相変わらず気持ちだけは若いつもりですが、三人の孫と戯れる白髪の年を迎えるようになってしまいました。

それに比べ年々若々しいエネルギーで各分野において他の大学に無い大きな特徴を出し成長して行かれる母校は、当時を知っている私にとって大変頼もしく、その発展には只々目を見張るばかりで、心強く嬉しく感じています。

反面、発展のための移転とはわかりながらも、理工学部が永年の歴史を刻み、それぞれの青春時代を過ごした衣笠キャンパスから去ることに電友会各位も私同様惜別の感を深く持つておられることと存じます。

いよいよ、平成六年四月からは、電気電子工学科も「びわこ・くさつキャンパス」にて新たに大きな第一歩を記さようとしています。先にも述べたように我々が通学していた頃以上に自然に恵まれた環境の広大なキャンパスで勉学にいそまれる学生諸君は大変に幸せだと思ふと共に、もう一度入学できたらと羨ましくも感じます。

移転にさきがけて、本年十一月二十三日に理工学部衣笠学舎「さようなら式典」が開催されます。式典に参加される電友会各位も衣笠キャンパスでの青春の思い出の一ページに意義深い別れを告げられることと存じます。

これを機にいままでに増し一層大きな飛躍躍進をとげ、世界の「立命館大学理工学部電気電子工学科」になられることを、電友会各位とともに心よりお祈り致します。立命電友会の永永い発展と先

生方をはじめ会員各位のご健康とご多幸を願いつつ拙筆を置きます。



(題字は久保之俊氏)

新任のご挨拶

電気電子工学科 川畑隆夫

三十三年間、三菱電機でパワーエレクトロニクスの研究、開発に携わってきましたが、四月から立命館大学のお世話になっています。まもなくびわこ・くさつキャンパスに移転という希望に満ちた恵まれたタイミングで、採用頂いたことをうれしく思っています。私も大津に引越す予定で張りきっています。

担当してきた機種は様々で、水車発電機の励磁装置、大形送風機 of 速度制御、紡糸機の制御、ウラン濃縮遠心分離機の制御、燃料電池のインバータ、無停電電源装置、変わったところでは深海二〇〇〇の推進制御などです。なかでも無停電電源装置(CVCFまたはUPSとも云う)の設計課長を務めていた期間が長く、十年間で五〇〇億を超える生産をこなしてきました。この間、さまざまな製品トラブルを経験し、何日も現場で寝泊まりして、解決したことがなつかしく思い出されます。

この二、三年は、3レベルインバータという方式を鉄鋼の圧延機に実用化することに努め、釜石や八幡あるいは宝山などの圧延プラントで数千kW級の圧延機に実用

し始めたところです。この原理は電気学会論文誌(D分冊)の七月号に発表しています。

三十三年間で一〇〇件程の特許を取り、約半分は実用化してきました。企業では安くて良いものをタイムリーに開発し、ビジネスにすることに専念してきましたが、きちつとした学問は充分できておらずお寒いかぎりです。ご指導とご支援を宜しくお願い申し上げます。

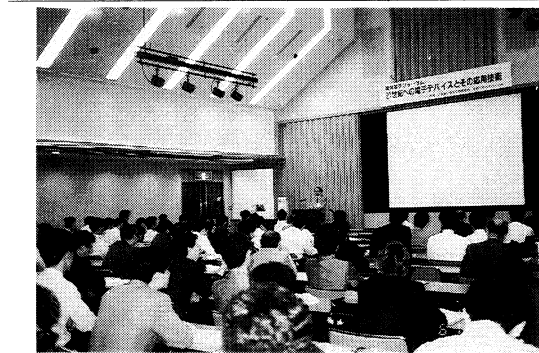
電気電子フォーラムの開催

昨年に引き続き第二回目の電気電子フォーラムが立命館大学理工学研究所と(株)京都リサーチパークの共催で六月十八日に京都リサーチパークで開催された。今回は、「二十一世紀への電子デバイスとその応用技術」というテーマのもとに、パワーエレクトロニクス、LSI、ディスプレイ、移動通信、光などの分野における各種の電子デバイスの現状と将来展望について講演が行われた。当日は政変が予想された日であったが、参加者は約一〇〇名に達する盛況であった。

午前の講演会は立命館大学小松康廣助教授の司会のもとに進められ、谷口理工学研究所長の開会の辞の後、「新パワーデバイスの応用と技術動向」と題して、立命館大学川畑隆夫教授により、歴史的経緯も含めてパワーエレクトロニクスにおける半導体パワーデバイスの応用の動向ならびに今後の課題が話された。ついで、「カスタムLSIの現状と将来」について、東芝マイクロエレクトロニクス(株)瀬見英利氏による、「ゲートアレイやスタンダードセルに次ぐ

新しいカスタムLSIの設計法や課題に關しての講演があった。

午後の講演会は立命館大学津田川勝助教授の司会で進められ、「ディスプレイデバイスの現状と将来」と題して、三菱電機(株)新居宏壬氏が、主として液晶ディスプレイおよびプラズマディスプレイなど薄型大画面ディスプレイの現状と今後の課題について話された。ついで、「非線形光学デバイス」と題して、立命館大学岡田正勝教授による非線形光学の一般的紹介と光第2高調波発生および光論理素子に関する講演があった。



津田川 勝 記

れてきた薄膜製作技術や微細加工技術が今後は太陽電池や大型薄型ディスプレイなど大面積化に対応できるような展開が要求されているという潮流と、その代表的な例として、エレクトロルミネッセンスデバイスやアモルファス半導体を用いた太陽電池ならびに多色発光素子を紹介され、それらの基盤技術としての異種材料の多層薄膜構造製作過程の重要性を強調された。

講演会の後、懇親会が行われ、相互の親睦とともに講演項目に関する個別討論も盛んに行われ、きわめて好評であった。

終身会費御納入のお願い

本誌第一号におきまして立命電友会の終身会費御納入のお願いを申し上げましたところ、三百余名にもおぼる方々よりお振込み頂きました。役員ならびに事務局一同厚く御礼申し上げます。今後さらに大学・電気電子工学教室・校友皆様方の相互の交流・親睦をはかるべくその活動を行って参る所存であります。つきましては本会の安定した運営を維持・確保すべく、未だ御納入頂いていない校友の方々は、是非とも終身会費をお納め下さいませ。諸君にも卒業当日の納入について理解を頂いております。校友の皆様方には郵便振込での納入をお願いいたしております。宜しく御協力のほどお願い申し上げます。

終身会費 壹萬円(立命電友会会則第十五条に基づく)

納入方法

同封の振込用紙に卒業年、御芳名、御住所、電話番号を明記の上、最寄りの郵便局にて終身会費をお振込下さい。
事務局に振込通知がありしだい領収書および立命電友会会誌設立記念号(残部僅少)を送付いたします。

御問合先

京都市北区等持院北町五六―一
立命館大学理工学部電気電子工学科内
立命電友会事務局

(中西、津田川、高山)

電話 〇七五―四六五―八二〇三
FAX 〇七五―四六五―八二三八

電気電子工学教室だより

学科主任 杉本末雄

教室仮移転の御案内

本学理工学部のみわこ・くさつキャンパスへの移転にかかわり、電気電子工学教室は十二月初旬より二月末頃の間、二号館三階へ仮移転致します。御来校の際には何かと御不便をおかけすることになりますが、御理解いただきますようお願い申し上げます。なお電話・ファクシミリならびに郵便物等の宛先は従来通り変わりありません。新キャンパス移転後の連絡先等につきましては、本誌ならびに校友会誌「りつめい」を通して皆様に御案内いたします。

電気関係四学会関西支部「準員のための講演会」の開催

毎年度恒例としております電気関係四学会関西支部主催「準員のための講演会」を平成五年十一月十二日（金）午後一時より本学末川記念会館にて開催致しました。

このたびは、現在、電子情報通信学会関西支部長であり、大阪大学工学部電子工学科教授の西原浩先生を講師に迎え、「光集積回路

工学の展望」の題目にて御講演いただきました。当日は本学科教員ならびに約百五十名の学生の参加がありました。

同窓会だより

チャージ会と一服の茶

昭二十五年専 米田 稔

（表千家）

「秋ちかき 心の寄や 四畳半」芭蕉の最晩年の句であります。春と秋に集うチャージ会の友々から、今秋は「茶に招け」と所望されている。第二の人生になぜ「茶の道」という興味があるらしい。

電力界の王と云われた松永安左衛門は「茶道は生活であり実践である」との信条で電力界での活躍の一方「耳庵」と号し近代の大茶人として有名であります。彼をなぜ「茶の湯」に傾倒させたかを探り、その保さと楽しさを見出すのも人生に無駄ではないと、この秋の集りは、十一月六日、夜の懇親会の前に「疊華院」に集い、晩秋、嵯峨の夕暮れの風情と共に、茶会を開くことにしている。

蹴り口より茶室に入り茶の湯に接したこと、静かにも心暖る一刻の初体験であった。

小山（写真は10頁右下）

辻村・前田研究室OB会

恒例の年越し行事となつています同窓会が本年は十二月十一日（土）、ホテル松井において開催致します。御案内は既にお手元に届いている筈ですが、郵便事情等万一不着の際には至急御連絡下さい。また、名簿が不完全のため昭和四十七年以前卒業の方で御案内が届いていない方も、至急御連絡下さい。

連絡先 〇七五（四六五）一一一

内線 三七八七

（本年度幹事 M2森岡）

苅屋研究室同窓会

平成五年八月二十一日大学近郊

のホテル（京都パストラル）において、研究室創設三十周年記念同窓会ならびに研究室が長年主催し続けてきた情報計測研究会（旧ラングム現象解析機器・応用研究会）二百回研究会開催記念祝賀会を合同にて開催いたしました。当日は御遠方のところ総勢六五名の方々の御出席を賜りました。総会においては数々の思い出、研究室が内外に果たしてきた役割、びわこ・くさつキャンパスの状況説明などが述べられ、続いて苅屋先生による記念講演が行われました。その後部屋を移して、懇親会が盛大に催されました。

院生の会

また本会開催を記念して三百数十名にも及ぶ卒業生の名簿を製本しました。当日の参加者はもちろんのこと不参加の方々すべてに本誌を発送し、諸経費の御援助を賜りました。本誌発行の主旨を御理解頂き御協力賜りました方々には心より感謝申し上げます。次回の開催は平成八年の予定であります。（高山記）

この数年大学院への進学率が急激に高まる中で、各々の研究室ごとに集まりがちな院生の相互のつながりを現役時から修了後将来にわたり確保することが本会を設立した主旨の一つであります。そのため総会の開催、入学生への本会の説明、会報の発行、終身会費の徴収、立命電友会との密接な協力関係などに役員一同尽力致しておりますが、なにぶんにも微力ゆえ今後とも会員皆様方の御協力賜りますよう宜しくお願いいたします。

さて「衣笠キャンパスさよなら記念式典（十一月二十三日）」開催に合わせて、当日午前十一時より四号館一階情報ゼミ室において第三回総会を開催すると共に「院生の会会報（第二号）」を発行致します。

（副会長 三上達也 記）

事務局だより

本会設立いたしましたからはや一年がたちました。この間、本会運営にあたり皆様方の多大なる御協力を仰ぎましたことを御礼申し上げます。懸念されておりました終身会費収納も軌道に乗り、一つの目標となる一千名までもう少しとなりました。本報にて再度お願い致しております通り、終身会費未納の方々におきましては会則の主旨を十分に御理解の上、お振込頂きますよう重ねてお願い致します。

現在、本会の定常的な運営体制の構築、名簿編纂を目標にした電友の情報整理を行ないつつあります。つきましては連絡先・勤務先等変更、本会への御要望、また本報への寄稿などございましたら事務局まで御連絡いただけますようお願い致します。

立命電友会事務局連絡先

〒六〇三—七七

京都市北区等持院北町五六一

立命館大学理工学部電気電子工学科内

電話 〇七五—四六五—八二〇三

FAX 〇七五—四六五—八三三八